

# 事例から考える地域での相談活動の意義と非常勤心理士の役割

北 濱 雅 子

## I はじめに

筆者は保育者養成学科に所属する短大教員であるが、A市において心理士の立場で10年以上にわたり相談活動を担当している。年度によって異なるものの、筆者が近年担当しているのは年間5回という実施回数の少ない相談である。

この相談を担当しているA市主管課は、教育関係全般の担当課でもあり、適応指導教室や少年育成関係の事業も実施している。筆者の相談も地域住民全体に広報され、相談対象は乳幼児から高校生までの広範囲にわたる。また不登校の保護者を対象にしたグループ活動も開催され、筆者もこの相談の時間の中でファシリテーターとして参加している。

ところで、現在一般的な教育相談として知られる制度は、平成7年から始まったスクールカウンセラーによるものであろう。学校現場における相談活動であり、スクールソーシャルワーカーによる相談も行われ、より充実した運用がなされている。しかし、本稿で述べるような学校以外の市という行政レベルで行われる相談も、地方公共団体が行うものとして、今後重要な位置づけを担うものと考えられる。内閣府から出された平成29年度版子ども若者白書においては、地方公共団体が相談、情報の提供・助言を行う拠点としてセンターを設け、一時的な受け皿となり、他の適切な機関に「つなぐ」機能を果たすことが求められているとしている。(2017 内閣府)<sup>1)</sup>。筆者が心理士としてかかわる相談も、規

模は小さいものの、継続して相談の申し込みがあり、地域に根付いた支援として位置づけられるだろう。

筆者が担当している相談の特徴は、年間の相談回数が少ないため、単発のかかわりになりやすい。多くは1回での相談で終結になるため、その中で来談者の目的等を見極め、次につながる対応をしていく必要がある。筆者ら(2003)<sup>2)</sup>は、学校における回数の少ない母親に対する巡回相談の経験から、巡回相談の特徴について述べ、教師が同席するという工夫によって、巡回相談の場と教育現場を「つなぐ」機能を果たすことができているのではないかと考察した。回数が限定された面接は、時間制限療法としてブリーフ・サイコセラピーや短期精神療法の枠組みの中で発展してきている。上地(1992)<sup>3)</sup>は、時間制限療法および危機介入援助の特徴として9点を挙げているが、その中には、治療目標の制限、焦点化面接と現症状重視、積極性と支持、治療の柔軟性、感情表出の促進などが含まれる。

また、相談は公的機関で行われるために、筆者がかかわっている相談も地域に対して広報が行われる。教育担当課で行われる相談のために「子どものための相談」という考えは基盤にあるものの、子育てから大人の問題まで、家族にかかわる様々な種類の相談内容が含まれる。対象となる子どもの校種も異なるために、幅広い発達や家族援助の理解が必要となってくる。また、子ども本人からの相談というよりも、保護者による相談が大多数を占めると想定され、子どものために、保護者とうどう協働していくかという視点も必要になってくる。

地域での開催回数の少ない心理支援の活動にあっては以上のような特徴が見られるが、こうした相談

平成31年1月7日受理  
連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地  
香川短期大学  
TEL 0877(49)8052 FAX 0877(49)5252

活動を考察する研究は、筆者が目にする中ではほとんどないように感じる。

以上により、本研究においては次の3点を目的とする。①筆者が担当した事例を紹介する。②学校現場以外で行う教育相談の意義と筆者の果たした非常勤心理士の役割を考察する。③開催回数の少ない地域の教育相談の事例について、心理士及び保育者養成学科の教員の立場から、子どもへのかかわり、家族へのかかわりについて考察する

## II 相談の受理と相談の流れ

広報を行った担当課あてに相談の予約を行い、相談日に事前予約を行った来談者が来所する。筆者は相談員として依頼されており、当日の時間のみの相談担当者（以下「相談員」もしくは「筆者」とする。）となる。来談者は、抱えている主な問題もしくは困ったこと（主訴）を相談員としての筆者に語り、それに対して筆者が助言等の支援を行うものである。一人の相談時間は概ね1時間程度であったが、必要な場合はまれに1時間半になることもあった。筆者は、これらについて簡単な記録を行った。本研究では筆者が相談対応をしたものを分析対象とした。

## III 相談概要

### （1）相談件数と分類

筆者が行った3か年度毎の相談件数と内容別の分類について表1に示す。来談者はすべて子どもの保護者であった。内容の分類にあたっては、①子どもの不登校あるいは不登校傾向（学校に行きたがらない等も含む）、②子どもの不登校と発達障害の問題、

③子どもの発達障害、④子どもへのかかわり、⑤家族の困りごとに分類した。相談の中では、様々な困りごとが語られるが、来談者から、相談の目的、あるいは困っていることとして意識され、初めに語られたことを、相談内容として分類、カウントしている。

相談総延件数は初年度（X年）は13件、次年度5件、3年目8件であった。この中には、地域の専門機関の職員が来所しての複数名の子どもの対応について助言を得たいというコンサルテーション依頼も含まれていた。これについては、複数名の子どもの内容であったが、来談者1人もしくは1組に対し1件のコンサルテーションとしている（合計4件）。このコンサルテーションを除いた来談者はすべて母親であったが、その内1例は母親と父親、1例が母親と祖母の2人による来談であった。2組の来談者については、複数回の相談があり5件であった。よってコンサルテーション以外での地域からの相談実人数は19人であり、これについての延べ件数は22件である。

主訴から考える来談者から語られる内容は、子どもが不登校、あるいは不登校傾向にあるという相談が多かった。不登校と発達障害の問題が同一の来談者から相談内容としてあげられる場合もあった。子どもへのかかわりの中では、粗暴な態度への対応、幼児に対するかかわり方があった。家族の問題においては、メンタルヘルスの問題があった。

コンサルテーションを除いた相談件数について、年度毎に主訴の内容の対象者である子どもの年齢別、性別に分けたものを表2に示す。以下については、延べ件数による数字である。

来談者の相談については、X年が10件、X+1年が5件、X+2年が7件であった。各年度共に、小

表1 筆者が行った相談件数と内容別分類

年度	来談者主訴					来談者相談 延件数小計	コンサル テーション	相談総 延件数
	不登校、 不登校傾向	不登校＋ 発達障害	発達障害	子どもへ のかかわり	家族の問題			
X	5	2		3		10	3	13
X+1	3			2		5		5
X+2	2	1	1	2	1	7	1	8

表2 筆者が行った相談件数と主訴対象者年齢区分と性別

年度	主訴対象者年齢区分					来談者相談延件数	主訴対象者性別	
	幼児	小学生	中学生以上	児童生徒の主訴小計	成人		男	女
X		7	3	10		10	4	6
X + 1	2	3		5		5	2	3
X + 2		6		6	1	7	4	3

学生の子どもに関する相談が多かった。幼児は2件であった。成人に関する相談も1件あった。主訴で話される対象者の男女比は5:6であった。

## (2) 事例の提示

相談の中から、①小学生不登校の相談として2事例(①-1, ①-2), ②発達障害に関する相談, ③複数回にわたる幼児期の子どもに関する相談, の4事例について提示する。

倫理的配慮: 資料の利用については、すべて匿名で表記することを前提に関係職員に承諾を得た。加えて、4つの事例提示にあたってはこうした倫理的配慮のため、論点に影響を与えない範囲で、いくつかの事例の特徴を合わせて記載している。年度についても、明確な表示を避け、X年を基準にしている。

### ①-1 小学生不登校傾向のある女兒事例

来談者: 母親

相談内容の対象者: B子(小1女兒)

主訴: 入学後すぐに学校のことを嫌がり、登校渋りをするようになる。

相談回数: 1回

経緯: 3歳児検診で全般的な発達の遅れがあると指摘され、以降主治医と相談しながらB子とかかわってきた。幼稚園では、教師の配慮もあり楽しく通園しており、小学校でもやっていけるだろうという見通しがあった。入学後すぐに登校を嫌がるようになり、夜驚、爪噛みも出現。1か月が経過。家族には伝えることができていない。

現在は、母親が学校に同行し、1日1回学校に向かうようにしている。担任の子どもへのかかわりは、母親からみたらそっけないように見える。今後スクールソーシャルワーカー(以下「SSW」と記載)

との面談を予約している。

筆者の対応: 現状ではB子と学校との関係が広がらず、本人も家族も学校に対する良い感情が育っていないと考えた。筆者が考える今後の母親の目標については、学校に対する母親の感情を改善していくこと、また、B子の今後の目標としては、B子が学ぶ楽しさを身につけることとした。そのため相談の中では、母親の気持ちに共感しながら、具体的方針として、今後の加配教員の配置など、本人の環境を整えるよう学校と調整するよう助言した。父親にまず相談し(保護者同士の共通の目標を持つ)、それをふまえて主治医と相談し、診断書の作成、状況を学校に説明するなどをを行い、B子が学校での活動を楽しく考えることができるような具体的な方策を学校、教育委員会等と話し合うことが望ましいのではないかと伝えた。SSWとの相談がすでに予定されているということだったので、そうした方針について調整して欲しいと依頼した。

母親へのかかわりにおいての配慮: 母親がB子のことを考えしっかりと対応していることを労い、承認・支持を積極的に行った。

### ①-2 小学生不登校男児の事例

来談者: 母親

相談内容の対象者: C男(小6男児)

主訴: 小5から学校を休み始めており、母親としてどうしていいかわからない。

相談回数: 1回

経緯: 小学5年生から登校渋りが始まり1か月の間にほとんど登校できなくなった。現在1年が過ぎたところである。その間子ども同士で、クラブ活動の遠征にいくため数日学校に行き、遠征にも参加できた。しかし、「疲れた、宿題もできていない」と

訴え、学校には再び行けなくなった。母親自身も仕事をしており、朝7時には出勤し帰宅は夜の8時。これまでの子育ては祖父母に任せきりであった。

母親自身は、専門機関での相談に約1年通っていたが、現在は行っていない。別の専門機関に子どもを連れていき、検査等を予約しているところ。

どうしていいかわからない、と途方にくれたような様子であった。

筆者の対応：母親のどうしていいかわからないという気持ちに共感しつつ傾聴を心がけた。

C男については、現状では不安耐性が弱く社会性がやや未熟である可能性があるかと推察するも、母親からは具体的なC男のエピソードが語られることがなく、C男に関する適切な助言を行うことが難しいと感じた。また、C男の1年にわたる不登校期間を過ぎてなお、母親自身がC男への理解が深まらず、学校へ行かないという現状を受け止めることが難しい状況である。結果として、母親自身がどうしていいかわからない不安で仕方がない状況であると考えた。

筆者が考える今回の相談の目標としては、C男の登校をめざす試み以前に、母親のC男への具体的な理解（C男が普段何をしているか、C男は何が好きか、など）を行っていくこと、また母親が父親への相談を行うことによって、両親がC男について悩みを共有していくことと考えた。

今後については、母親自身が不安感が強く不安定になりやすいと考えられる。そうした場合、面接間隔が短い、継続した面接が必要であると考えた。専門機関への予約もしているとのことであったので、そこでの継続面接が適当であると考えた。本面接では、母親が忙しい中ががんばって子どものことにかかわろうとしていることについて承認、支持した。

## ② 発達障害に関する女兒の相談

来談者：母親

相談内容の対象者：D子（小3）

主訴：病院で行った知能検査（WISCⅢ）に関する説明と助言依頼。

相談回数：2回（事例内容は2回目での相談）

経緯：病院にて発達障害の診察の際、知能検査を行った。結果表と共に説明は受けたものの、日常生活の中でどのような工夫ができるかを相談したいと

のことであった。

筆者の対応：結果表により、具体的に、知能検査で示される知的領域とそれに関連付けられる生活上のスキル、現在の興味、あるいは学習内容と関連付けて説明した。その上で、さらに工夫できることなどの説明を行った。学校とも調整するよう助言した。

今後の心配として、ネットに拘泥する可能性もあるので、使用時間等、使い方についてあらかじめ約束をしておくよう助言した。

母親は1回目面接ではD子へのかかわりを自分なりに確認したいということで来談した。専門機関等とD子に関する調整的面接を行い、学校との関係も良好であることがわかっている。母親自身が今回の筆者との相談に関して、目的が明確であった。従って、この面接においては、筆者は来談者である母親の意図を大事にし、目的を確認した上で、それに対してのみ助言することとした。

## ③ 幼児期の子どもへのかかわりの相談から家族の問題への継続した事例

来談者：母親

相談内容の対象者：1、2回目においては、3歳長男E。3回目においては家族。

主訴：1、2回目は子どものかんしゃくとトイレトレーニング。3回目は家族とのかかわり

相談回数：3回

経緯：母親は次男を出産後育休中。復職をめどに、保育園入園の予定。

筆者の対応：【1回目】Eのかんしゃくがひどく母親である自分も不安定になり子どもに対応できないことを話す。子どもと一日一緒にいると、Eが甘えたいと感じているのは理解できても、自分もどうしていいかわからず、怒ってしまい悪循環であると涙を流す。【2回目】Eのトイレトレーニングについてであった。育児に関連した夫とのコミュニケーションについても話題に出た。

1回目、2回目共に、子育てに関する内容については、母親を労い、傾聴した。その後一日の子どもとのかかわりを具体的に聞き、できる工夫を提案していった。母親自身はとても真面目で几帳面であった。それゆえに、子育てにおいて悩む部分があった



ようであるが、力を抜いて育児をする方法を、毎日の子どもとのかかわりの中で考え具体的に助言していくと、「そうすればいいんですね」と前向きに取り入れたいという言葉も出てきた。2回目の来談では、助言が効果的であったことが話題になった。子どもを連れていける場が欲しいとのことであったので、すでに利用している場所以外にも、本機関で過ごすことも可能と提案した。3回目は家族のメンタルヘルス上での悩みであった。具体的な就業上の問題についての対応を助言した。

母親自身は、相談において聞きたいことが明確であった。また助言をすぐに取り入れて、とても楽になったという反応もあった。筆者の目標は、母親が取り入れやすいように、具体的な内容を意識して助言することであった。また、母親自身が自己肯定感を持つよう、母親の良さをフィードバックした。

#### IV 考察

目的に沿って、事例の提示を行った。またこの事例を通して、1) 学校現場以外で行う相談の意義と筆者が行った非常勤心理士の役割、2) 開催回数の少ない地域の相談の事例について、心理士及び保育者養成学科の教員の立場から、子どもへのかかわり、家族へのかかわりについて考察する。

##### 1) 学校現場以外で行う相談の意義と筆者が行った非常勤心理士の役割

本相談は、適応指導教室の開催や少年の育成を目指す担当課が行っているものであり、当初から学校と関連した子どもの問題を念頭においての教育相談活動であった。筆者の担当した事例を振り返っても、不登校、発達障害など半数以上が児童にかかわる相談であった。現在スクールカウンセリングなど、学校現場での相談活動は充実しつつあるものの、小学校においては毎週の相談開催にはならない所が多く、今回小学生児童に関する相談が多かったひとつの理由になるだろう。また、提示した事例でも見られるように、ひとりの保護者がいろいろな相談先で助言を受けているということも多く、保護者である母親自身が、様々な資源を使いながら、子どもと向かい合っていることが推察される。筆者がかかわっている相談活動は、こうした資源の一つとし

て機能していると考えられる。

また、全体としては少なかったものの、幼児期の子どもに関する相談もここに含まれていた。学校現場での相談に含まれない状況にある家族、あるいはどこに相談に行けばいいかわからない、といった家族にとっては、第一次の相談窓口となり、また社会資源として機能しているともいえるだろう。複数の校種にわたる子どもの相談、子どもにかかわる家族の相談などもこれにあたるだろう。

筆者自身は、こうした相談に非常勤の心理士としてかかわってきた。相談は、来談者が日常のつながりから離れて自分を語る一面もある。普段の生活とかわりのない非常勤の心理士だからこそ、安心して話ができるという利点もあると考える。しかしながら、相談場面においては、常勤の心理士が配置されることがより望ましいのは言うまでもない。今後そうした常勤の心理士が配置された場合においても、心理士の持つ非日常性を保つべく工夫していくことは必要であろう。

##### 2) 開催回数の少ない地域の相談の事例について、心理士及び保育者養成学科の教員の立場から、子どもへのかかわり、家族へのかかわりについて考察する

地域での相談活動は、概ねその自治体の予算等に影響され、回数等が決まってくる。また、地域住民と近い自治体での相談であることから、様々な種類の相談が寄せられる。3年間で15回という相談の中で、親のグループ活動を除いたものが個別面談26件であったという件数については評価が分かれるところではあるものの、幼児の子育てにかかわるものから成人のメンタルヘルスまで、幅広い内容であった。筆者は、児童相談所、教育センター、学校でのスクールカウンセラー等、乳幼児検診を含む幅広い年齢の相談を経験に持つ。また、現在の教員活動の中では、保育者の研修等にも携わった。また、企業でのメンタルヘルス相談も体験し、幅広い年齢の相談に対応してきた。そうした相談の経験が、地域における幅広い相談対応に生かされていると感じる。

今回提示した事例について、相談が効果的であったらと筆者が感じたものは、事例②(D男母親)と事例③(E母親)であった。いずれも母親の相談の目的が明快であったものである。本施設での筆者

による相談が2か月に1回であることを母親自身が理解し、相談に求めるものを明確にしている。一方で、事例①－2（C男母親）の「どうしてよいかわからない」という不安を強く持った母親に対しては、本機関での相談を漫然と継続することは有効ではないと感じた。気持ち（不安）に共感し感情の表出を促進することは、回数の少ない面接のひとつの特徴であり長所として考えられることではあるが、自我の弱い来談者の場合、相談と相談の間の期間が長すぎるために、その不安感が増しやすい。また筆者との信頼関係が十分にできておらず、様々な問題を意識しながらも自分の問題として向き合うことができないので、問題の焦点化ができにくい。相談間隔を短くできる相談機関でじっくりと問題解決に向けて考えることができる場が適切であろう。母親自身を支持し、力づけるという面では一つの役割を果たしてはいたと考えるが、母親自身が目的を明確にして次の行動につなげるという意味では、効果が少なかつたのではないかと感じる。

最も多かった不登校の相談については、母親自身が背景に発達障害の問題があるのではないかと専門機関を通して理解しているものがあり、さらに、本人の状況を聞くと、発達障害を推測させるような事例もあった。家族の対応において診断は必ずしも必要ではない場合もあるが、通院を本人と家族が納得し、子ども本人への理解が進むのであれば、医療機関への受診につなぎ、環境調整をしていくような助言は必要であろう。また、本機関は適応指導教室とも連携をとることができるので、家庭での生活の次のステップとして、子どもの行動を広げる手立てとして提案していくことも必要であろう。

また、相談の受付が教育担当課であることも影響しているのであろうが、半数以上が学童の不登校の問題であった。児童の不登校数については、中学生にくらべると少ないものの、平成25年以降増加している（文部科学省 2018）<sup>4)</sup>。今後も相談内容としてはかなりの割合を占めることは確実であろう。不登校の背景には多様な要因が想定されるので、一回の相談で解決できるものではもちろんない。相談回数が少ないからこそ、相談員が地域の資源をよく知り、次の専門機関につなぐ役割がより必要になっていると感じる。

今年度から、公認心理師の国家試験が始まり、国家資格としての心理職が誕生する。支援においては、多職種連携、地域連携が必要とされている（2018）<sup>5)</sup>。今後心理士として、地域での相談を行う以上、対象者の守秘を守りながらも、地域の専門機関や専門家との協働は必須である。相談の中で、そうした情報収集をしつつ、了解を得ながら、関係する部署、機関へつなぐことを行わなければならない。特に、年間5回という回数での相談であるので、こうした「つなぐ」役割をさらに意識することが大事である。

事例③については、幼児の子育て相談から、家族のメンタルヘルスの話題に相談内容が変わっていった。地縁がなく、相談する相手がなかなかいない状況の中で、筆者は来談者の時折会う親しい肉親のような関係性の中で、母親の助言者として存在したように感じる。本機関の職員も、母親の依頼を受け入れ、母親と子どもの生活を支えた。子育てに関する問題の解決が、さらに、家族の相談へつながっていったのではないかと考える。本事例は、相談員による相談のみならず施設（建物や職員を含む）そのものも、母親を支える地域の資源として機能していた子育て支援の事例と考えられる。家族の関係性の改善にまでは踏み込むことはできなかったが、子どもという一人の対象の相談だけではなく、その母親との関係、あるいは母親と家族がどのような関係にあり、地域の中でどのような立ち位置にいるかということも想定し、支援していくことが必要であると感じた。

## 引用文献

- 1) 内閣府, 2017, 平成29年版 子供・若者白書(全体版)(PDF版) p44, 2019.1.3, 閲覧日, <https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29honpen/pdf/mokuji.pdf>
- 2) 北濱雅子 田中雄三, 2003, 母親面接に教師が同席することの意義—巡回教育相談等での経験から—, カウンセリング研究, 36, 81-90
- 3) 上地安昭, 1992, 時間制限療法(短期精神療法)(氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山永康裕 編 心理臨床大辞典), 培風館, 311-314

- 4) 文部科学省, 2018, 平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について(その2), 2019.1.6, 閲覧日  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/30/10/\\_icsFiles/afieldfile/2018/10/25/1410392\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/_icsFiles/afieldfile/2018/10/25/1410392_2.pdf)
- 5) 一般財団法人 日本心理研修センター, 2018, 公認心理師現任者講習会テキスト2018年版, 金剛出版, I 公認心理師の職責p11-p14